

「笹川杯作文コンクール 2010—感知日本—」

入賞作品集



財団法人日本科学協会
教育・研究図書有効活用プロジェクト



このプロジェクトは競艇の交付金による日本財団の助成金を受けて実施しております。

目 次

1. 「笹川杯作文コンクール 2010」～中国語で応募～	3
(1) 一等賞	
信陽師範学院 外国語学院英語学部 4 年 李師荀	3
上海社科院文学所 副研究員 陳占彪	4
北京市房山区園林緑化局 果樹工程師 王喬	6
汕頭大学中文学部 4 年 賴麗思	7
浙江大学經濟学院金融学部 2 年 王翔	9
中国人民大学經濟学院經濟学部 1 年 羅樹郁	10
(2) 二等賞	
河南省 王運涛	12
北京市 付如石	14
重慶市 魏乾	15
陝西省 劉沢照	16
広西省 庄巖	18
浙江省 崔周道	19
北京市 朱清秀	21
湖北省 羅露	22
山東省 付曉利	24
四川省 周夢娜	26
山東省 王錫嘉	28
河南省 黄俊豪	29
2. 「笹川杯作文コンクール 2010」～日本語で応募～	32
(1) 優勝	
北華大学日本語学院日本語 4 年 藩瑩	32
長春理工大学外国語学部 4 年 張雪	33
(2) 二等賞	
大連大学 王貞	34
三江学院 吳夢霞	35
(3) 三等賞	
東北師範大学 向鳳	36
相潭大学 袁江	37
長春理工大学 李成英	39
雲南師範大学 晋春娥	40
(4) 優秀賞	
長春理工大学 孟昕	42

長春理工大学	陳媛媛	43
常熟理工学院	袁婷	44
東北師範大學	李佳	46
鷄西大學	董楠	47
寧波大學	朱艷霞	48
山東大學	張笑笑	49
三江學院	顧菲菲	50
湘潭大學	周友文	52
蘇州大學	汪琳	53

1. 「笹川杯作文コンクール 2010」～中国語で応募～

※原文に忠実に翻訳しました。

(1) 一等賞

「私とT先生の茶道研究」

信陽師範学院 外国語学院英語学部 4年 李師荀



私は外国語学部に所属する一大学生であるが、学部にはKT先生という日本人教師がおられる。彼は五十数歳で、中国に来て5～6年になるが、流暢な中国語を話すことができる。

T先生は、背は高くないが、恰幅が良く、髪は少し薄くなっている。日本人男性に特徴的な綺麗に髭を剃るというようなことはしていないので、見た目でも中国人と誤解されやすい。

以前、学部内の行事でT先生を招いての和服文化講座があった。私はイベント責任者のひとりだったので、講座の具体的な内容を相談したいと思い、T先生のお宅へ伺った。まさか、そこから私が茶道を始めようとは思ってもいなかった。

その日、私はだいぶ早くT先生のお宅に着いていたが、約束の時間まで呼び鈴を鳴らさず待っていた。呼び鈴を鳴らすと直ぐに現れたT先生は、淡い青色の和服に下駄といういでたちで、笑みを浮かべて挨拶して下さった。今回伺いする目的は事前に電話で伝えてあったが、まさか本当に和服を身につけて出迎えていただけるとは！私は少しの間、口にすべき言葉も思いつかず、ひたすら頭を下げていた。T先生にどのように応接間へ通していただいたのかもまるで覚えていない。

応接間に入って腰を下ろし、あたりを見回してから気づいたことだが、先生のお宅はかなり中国的になっていて、板の間と壁掛けの浮世絵だけが日本の風情を醸し出していた。その時、先生は冷蔵庫から飲み物を出してきて、涼をとるようにと勧めて下さった。

それを受け取った時、素晴らしい茶道具と信陽毛尖（白茶）の箱がふと目に入った。閃いた！祖父母が茶を嗜んでいたため、私は小さい頃から簡単な茶芸を学んでいたのである。そして、T先生に点前を披露して先ほどの失態を挽回しようと思いついたのだ。そこで、「先生は中国にいらして長いので、きっと中国の茶文化もよくご存じでしょう。お茶がお好きということは存じあげております。私も少しは中国茶芸の心得がありますので、一度お茶を差し上げたいのですが。」と声を掛けてみた。

先生はそれを聞くとさらに笑顔を輝かせ、茶道具やら熱湯やらを急いで用意してくださった。それから、私の出番である。ポットを温め、茶葉を入れ、熱湯を注ぎ、蓋の上から更に熱湯をかけ、茶杯を温め、注ぎ分ける、首尾一貫した動き！その間、私は長年修業してきた“鳳凰三点頭”、“関公巡城”、“韓信点兵”の“技”を特別に披露した。注いだ信陽毛尖からたちまち芳香があふれ出し、茶葉がすらりと美しく立つ！

先生は呆然としてご覧になっていたが、親指を立てて見せ、実にすごいと賞賛して下さった。私自身も、かなり満足していた。内心、私ごときの不完全な技でさえT先生を震撼させられるのだから、中国の茶文化は奥が深いものだなと思った。思わず有頂天に！しかし、驚いたことに、先生は急に立ち上がると「ちょっと待っていてください。」と言うなり、子供のように寝室へ潜り込んでしまわれたのだ！おおよそ10分程して先生が戻られると、今度は私が呆然とする番だった…先生は大量の古めかしい茶道具を持ってくると、座卓の前に正座をされたのだ。その様子を見た私も、それに合わせて向かいに正座した。先生は笑いながら、「いいよ、いいよ、慣れていないなら、座っていて下さい。」と声を掛けて下さった。”

そして、先生は私に茶道具を一つずつ紹介して下さいだったのである。茶碗、茶入、茶杓、茶筌、柄杓、水差し、風炉、ふくさ等々。それから、先生は「今日は君に来てもらったのだから、君が客人です。さっきはお茶を淹れてもらって、申し訳ないことをしてしまったので、今度は私がお茶を点てさせていただきますよ。」と仰った。

そこからはT先生が茶道を披露して下さい。初めに茶道具を盆の中から一つずつ取り出して、茶碗を拭き、湯を沸かし、抹茶を茶碗に淹れ、点てる。先生の動作はいずれも簡素なものだったが、茶道具を並べ、茶碗をささげ持ち、水を汲むといった一連の動作にかなりのこだわりがあることは見て取れた。特に、最後、右手の指を揃えて、親指と人差し指の間で茶杓を支え、ゆっくりと下に置き、茶碗を左手に乗せて、右手で何度か回してから差し出して下さったところでは。私は、日本の茶道に関係する知識を思い出そうとするのが精一杯だった。見よう見まねで碗を捧げ持ち、手のひらに乗せて回し、頭を下げてお茶を頂いてから先生に一礼した。

お茶を頂くと、私と先生との距離はかなり近くなり、会話もだいぶ楽になった。その午後、講座の細かい内容を相談する以上に先生と話し合ったのは、中日の茶文化にある相違についてであった。

私は「中国の茶文化は儒教が核となっており、『茶は礼儀と仁義によく、敬意を表すことも、正しい行いをすることも、志を高めることもできる。』と言われていています。茶道は自然美の追求であり、お茶を飲むことは精神的な喜びの一つです。老いも若きも、身分の上下もなく楽しめるものです！」と言った。

先生は、日本の茶道とは“和、敬、清、寂”、つまり人間同士の親睦と互いへの敬意、心の浄化、孤独に耐え落ち着いた精神の寛容を重んじるものであるということを紹介して下さい。「茶は、禅と一体なんだ！」とのことである。茶道は作法が厳格で、質素で静寂な美しさを重んじ、高尚な芸術のひとつであり、その社会性と大衆性は未だ広く深くというレベルではないということだ。「先程のお点前でも、茶道具とご自身の素養には限界があり、日本の茶道の規範を完全に守っている訳ではないんです。」と仰った。私の茶芸を見てふと思いついたに過ぎないということである。「もし、本当の日本の茶道を見たいのなら、日本のお茶屋さんに行かないといけないよ！」とのこと。

おいとまする時、先生は感慨深げに声を掛けて下さい。「今日は君と茶道の研究ができて、とても楽しかった。中日両国の茶道は結局どちらが優れているかの話については、中国の流行語に倣いたいと思います。中国の茶芸であろうと日本の茶道であろうと、淹れたお茶が美味しければいいんだよ！」

そう、中国の茶芸も日本の茶道も、それぞれの民族の伝統文化の精髓に完全に浸っているのだ！きっと中日両国の茶文化は、いずれも歴史の大きな流れの中でこそより輝くことだろう！中日両国民の友情も、ほのかな茶の香りと同様にすがすがしく永遠に香っている…

「日本円に描かれた“文化的英雄”」

上海社科院文学所 副研究員 陳占彪



今年の夏、私は6日間の日本ツアーに参加した。客観的に言うと、今回のツアーは満足できるものではなかった。上海という世界中の何処と比べても引けを取らない大都市で10年以上も暮らしてきて、日本に行っても感じられる“現代化”なるものに興奮を感じることもない。例えば、誰もがより高速な“リニア”に乗れるというのに、“新幹線”に驚きを期待することができるだろうか？誰もが“東方明珠”の高さ263mの展望ロビーに上がることが

できるし、上海環球金融センターの474mもの高さの100階展望ロビーにも上がることができるというのに、東京都庁の202mの高さしかない展望台にどれほど震撼することができるだろうか？また、このツアーが“文化観光”と称して巡った先々には免税店があって、日本の商品を買うばかりで、日本文化の精髓を子細に観察するどころではなかったのも、文化比較もできなければ語ることもできない。

しかし、この満足とはほど遠いささやかな日本旅行でも、日本について深く印象に残った小さなことはいくつかある。こうして今思い出しても感心してしまうことばかりである。

“歩行者優先”のマナーなどは、我々にとってとても“新鮮”なものである。上海では平日ものすごい勢いで車が走っていて、怖い思いをしたり、よけたり、立ち止まったりしないことなどあり得るだろうか？ドライバーは、歩行者を見つけると、クラクションを鳴らしたり怒鳴ったりするのである。しかし、日本では違うのである。歩行者を見つけると、決まって車は静かに停止して歩行者を先に通すのだ。私は、中国国内での習慣から、初めはまだ車を見ては足を止めていた。そして、ドライバーが「お先に」と示してくれてから歩き出していたものである。最も感動したのは、日本旅行の最終日だった。成田空港のホテルで飛行機を待つ間、信号機のないところを渡って向こう側のスーパーへ向かおうとした時のことである。路上には車が少なかったため、どの車も比較的スピードを出していた。道路を渡ろうとした時、遠くに車が見えたので、我々はその通過を待つことにした。まさかその車が減速して止まってまで、我々を先に通してくれるとは思わなかった。そんなことができる人は中国には殆どいないが、日本では誰もができるようにある。

我々は“礼儀の国”から来た観光客であったのだが、日本人の礼儀正しさと謙虚さには感動させられた。礼儀正しさは口先だけで実現できるものではなく、忍耐力が要るものである。日本人は我慢強いのだ。ツアーバスが箱根の温泉ホテルに着いた時、支配人が門前で待っていて、一人一人に笑顔で頭を下げていた。ルームキーを受け取った時も、支配人はわざわざ部屋の前まで案内してくれた。こうしたことは、簡単なことだろうか？まあ簡単ではある。たかがお辞儀ではないか。ただ、それがどれほど面倒なものかは、試してみればいい。それこそが、礼儀というもの、或いは、文明というものかもしれない。

日本ツアーでは日本文化を堪能することはできなかったが、日本人が文化を重んじるということは十分に感じ取ることができた。日本にいれば日本の貨幣に関わらないわけにはいかないが、そこに描かれた人物像には私を引きつけ、深く考えさせるものがあった。例えば、一万円札には福沢諭吉、五千円札には樋口一葉、千円札には野口英世の肖像が印刷されている。世界の多くの国々において、紙幣には自国の皇帝や政治家が印刷されている。日本の紙幣にあるのは、同民族の思想家、小説家、医学者といった文化人の肖像なのである。文化面の（政治面ではない）ヒーローに対する尊敬の念は、日本民族の貴く優れた特徴である。中華民族は悠久の歴史、豊かな文化を誇るが、孔子、魯迅、曹雪芹、李時珍といった人物達の胸像が人民元に印刷される日は来るのだろうか？

かつて魯迅先生が日本人の“真面目さ”に学べと説かれたが、日本人の真面目さは、その“細やかな”一面に現れている。例えば、化粧品のジャンルの多さである。男性向け、女性向け、50代向け、30代向けと、めまいがするほどある。他にも、普通の水銀式体温計では子供の体温が測りにくいということで、耳たぶに一秒間あてるだけの機種が開発されていたりする。ドライバーの放射熱が子供に危険だということで、髪を乾かす専用のタオルが、老眼の人でも足の爪が切りやすいように、ルーペ付きの爪切りが、等々。その細やかさこそが、将に少しも手抜かりのない日本人の真面目さを表している。

日本には偽物が出回っていないので、騙される心配もなく買い物ができるという。日本では一物二価になることもなく、価格交渉の手間もない。日本は治安が良いので、スリやひったくりの心配もないそ

うである。そんな日本で生活することができたら、のびのびすることができるのではないだろうか？

率直に言って、日本で最も深く印象に残ったものとは、日本人が誇る現代化でもなく、風物文化でもない。それは、日本人が日常生活の一挙一動に見せる素養の高さである。素養が高いというのは羨ましいことであるし、当然、学ぶに値することだと思う。

「分類する心」

北京市房山区園林緑化局 果樹工程師 王喬



私は、中国人の子供を日本の幼稚園に入れた時の面白い話を友人から聞いたことがある。幼稚園は、保護者に大きさやデザインの異なる鞆（文具用、着るもの用、靴用、食器用、毛布用）を用意し、それから A は長さ何 cm で、B は幅が何 cm、C は D に、E は F に入れるようにと指示してきたという。最初、中国人の保護者はどうしてそこまで煩雑なことをしなければならないのか理解できなかったが、後に子供が物を種類ごとに理路整然と整理することができるようになると、保護者たちはその指示が子供の真面目さと分類能力を伸ばす第一歩だったということが分かったそうである。その話を耳にした時点では余りにしていなかったのだが、最近になって日本のごみ分別に関する報道を見た時、私は、ふとそのことを思い出した。そもそも日本人は幼稚園児の頃から真面目に分類する心が育成されるよう配慮されており、だからこそ、ごみの分類も世界の最先端であるということがようやく分かったのである。

日本でのごみ分別の厳密さには感服させられるものがある。まず、大分類として、燃えるごみ、燃えないごみ、資源ごみ、粗大ごみ、有害ごみなどがあり、それから、各々いくつかの中分類に分けられ、さらに小分類に分けられるものもある。種類が異なるごみの扱いには、捨て方にも処理方法にも厳格な要求があり、規定の時間以外には排出することができないことになっており、出す時間を間違えると、罰金を科せられことすらあるのだ。また、古くなった家具や家電などの大きい物を捨てる時には、大型ごみの回収施設に予約したり、新しい製品の購入に合わせて古いものの回収を購入先に頼んだりする必要がある。これらはいずれも、日本では早くも 1970 年と 1971 年に法律で定められている。細かく述べれば、3 単位分の科目の履修に相当するかもしれない。

ある友人が日本へ研修に行った時、入国して“外国人登録証”の手続きをする際、専門の担当者からごみの分別に関する注意事項を説明され、“ごみカレンダー”を渡されたという。カレンダーは月替わりで、様々な色や記号でごみ分別に関する詳細説明と取り扱い方法が記されていた。その友人が東京に着いて最初に渡された書類もごみ関係のものであり、イラストが多くて文章も素晴らしい 12 ページ構成の冊子『資源とごみの分類と廃棄の方法』だったそうだ。彼が日本に行って最も厄介なことは何かと尋ねたところ、彼の答えは“ごみ出し”であったが、以外にも最も大きい収穫も“ごみ出し”と回答した。彼はカップラーメンの空容器を例に挙げて話してくれたのだが、外側のシュリンクフィルムは燃えないごみ、上面の紙蓋は燃えるごみ、カップは廃プラスチックなので、それぞれ分けて出さなければならないという。しかも、カップは水ですすいで乾かしてからでないと、廃プラスチックとして出せないそうである。

名古屋に住む別の友人も同じような事実を証言している。商業施設の出入り口そばにはゴミ箱が並んでいるのだが、それらは、ペットボトル、ガラス瓶、スチール缶、アルミ缶、段ボール、紙類、プラスチック製品、その他のごみと 8 種類にも分かれているという。その地域の住民は皆それらのゴミ箱が“好

むもの”を十分に理解しており、特に意識することもなく正しいごみ箱へきちんとごみを捨てることができる。友人があまりに複雑なごみ箱に疑問を感じていると、学生らしき少年が二人やってきて、外した瓶の蓋をある箱に、瓶に貼ってあったラベルをはがして別の箱に入れ、ガラス瓶をまた別の箱に入れたのだが、かなり慣れた様子であったという。

日本のごみ分別制度では、ごみの減量 (Reduce)、再使用 (Reuse)、循環再利用 (Recycle) の“3R”のライフスタイルが提唱されている。ごみの分別回収と再利用は、日本の循環型社会にとって重要な指標となっているのである。日本国民は、小さい頃から“世界には真の意味でのごみはないが、置き場所を間違えられた資源はある。”という教育を受けているのだ。

日本のごみ分別制度とそれに対する真面目な取り組みは、我々も大いに参考にすべきである。中国ではここ 10 年～20 年、各都市でごみの分別と循環再利用を試行していて、街角には“回収可能ごみ”と“回収不能ごみ”の分類表示が見られるものの、どう分類すべきか本当に分かっている人は少ないため、ごみ箱の分類はほぼ有名無実となっている。日本人の真面目さ、細かな分類を見ると、我々がさらに出来ることは未だかなり多い。

全ては態度によって決まる。日本国民が真面目な心でごみの分別に向き合っているからこそ、日本のごみ分別水準は世界でも最先端なのである。これに関する我が国と日本との差はと言うと、恐らくソフトの面にあるのではないかと思う。つまり、政府と民衆のごみ分別に対する認識—政府のごみ分別に関する制度構築、民衆のごみ分別に対する真面目さと環境保全・省エネ意識である。みんなが手間を惜しまず、循環再利用の思想を確立し、真面目な態度できちんと分別しないと、ごみ分別において日本に追いつき、世界の先進的水準に達することは不可能である。これを成し遂げるには、日本に学び、“子供の頃から”国民の真面目に分類する心を培うべきかもしれない。

その時こそ、私たちが創造したごみが無く資源が循環再利用される社会を見ることが出来る時である。そして、これら全ての実現に必要なものは、我々のちょっとした努力だけなのである。

「中日ワークキャンプでの共通点と相違点」

汕頭大学中文学部 4 年 頼麗思



改革開放のペースが加速化するにつれ、中国の医療衛生の水準も日を追って向上してきた。1980 年代には既にハンセン病も蔓延状況の管理と治療体制がだいぶ整っていた。しかし、それまでは、何万という患者が治療費や薬品の不足により適切なタイミングで治療を受けられず、後遺症が残っていた。目、顔面、手の指、掌などに奇形が生じたハンセン病患者は、人々の脳裏に悪魔のような印象を残した。社会的差別から、ハンセン病から回復した多数の患者は、政府により辺鄙な野山に移住させられ、集まって集落を形成していた。3 年前、私はボランティア的な性格の NGO に参加した。主な業務は、こうした集落に住む人々に対するケアである。

2009 年の 8 月、私は中日両国の青年ボランティアが協力する 10 日間の夏期ワークキャンプに参加した。場所は広東省河源市紫金県のやや閉ざされた小さな山村で、わずかに残っていた 3 世帯のお年寄りがケアの対象であった。中国側のメンバーは 10 人で、主に広東地区の数大学から参加であった。日本側のボランティアは 7 人で、東京にある早稲田大学と立教大学の学生であった。期間中に深く感じたことは、誰もが善意を持っていながら、中国と日本とでは、文化の違いより同じことをするにしても、考え方ややり方に違いがあるということであった。

ワークキャンプ開始前、双方のボランティアが、ネットや海を越えた電話で業務方針の打ち合わせをした。前回分までの通常業務に関する参考資料を手元に、メンバーが実情を考慮した結果、洗濯、繕いもの、草むしり、種まき、電器の修理、演芸、山での柴刈、傷の手当てなどの基本サービス外に、屋根とトイレの修繕、新しい水源の確保、水道水の受け皿の用意、路面の補修、街灯の設置などの項目を追加した。

最初はこのプランで完璧だと思っていたのだが、日本のボランティアは「もっと考えよう、まだできることが絶対あるから」と提案し続けた。最終案を決定する前日になって、日本側ボランティアが、一般村民の訪問回数を増やそうと言い出した。元々の目的地から2kmほど離れたところに甘洞村という百数戸の村落があって、私達の滞在先は閉鎖された診療所で、ちょうどこの村と例のお年寄りが住む3世帯との中間に位置しており、両者を結ぶ架け橋としてちょうど良かったのである。中国側は、数十年来ずっとハンセン病の元患者を“敬遠”し続けてきた村民の意識を変えるなどのような骨折り損になることより、実際に必要とされるサービス項目に力を入れた方がよいと考えていた。しかし、日本側は、人々の見方を変えるには根気と突破口が必要であると言って譲らなかった。前回までに関係の改善ができなかったのなら、今回のチームが準備を整え“氷を砕く旅”に臨むべきであるというのだ。双方が摺り合わせをした結果、最終的に追加になったのは、村への訪問回数を増加することと甘洞小学校での課外活動を展開することだった。

ワークキャンプを展開する過程でも、双方の理念や行動には明らかな違いが見られた。例えば、日本のボランティアは自費負担ではるばる中国までやって来るのは、人助けのみならず、成長するための試練と内なる楽しみの源泉を求めためであるということ 강조했다。中国側も当初はそうした気持ちを抱いていたのだが、いざ実施という段階となると、重点は徐々に業務成果の方へと移っていった。毎晩、仄暗い明かりの下に集まって一日の成果を話し合う前に、日本側のメンバーはいつも「今日は楽しかったですか？」と聞いてきた。中国側のメンバーがワークキャンプの成功や失敗について話そうという時、日本側からは「何が勉強になったのですか？」と聞かれた。ミーティング後、日本側のメンバーからビールを勧められ、上着を脱いで踊り始める者まで出た。踊り疲れると、そのまま庭に寝転がり、飲みながらおしゃべりである。さらには、外を流れる小川のせせらぎが聞こえてくると、突然、笑いながら外に出て河床に横たわる人もいた。

ある晩など、中国側のメンバーが皆ばたばたと寝てしまってから、日本側の7人が酒興に乗じて真夜中の星を見に滞在先の裏山の頂上まで登ったなどということもあった。ボランティア生活を楽しもうという日本側のメンバーの浮きたつような空気に影響され、こちら中国側のメンバーも次第に気持ちが緩み、彼らの仲間に加わった。また、日本側も私達の元々の考え方を尊重し、何事も相談する形で討論し、こちらの飲食習慣に合わせようと努力してくれた。彼らは中国式の大鍋とかまどで火を起こし、ご飯を炊く技を直ぐに身につけた。

ワークキャンプ終了後、私は日本側リーダーからメールを受け取った。メールには壁に貼られた世界地図の写真が添付されていて、拡大してみると、赤い小さな旗があって、それはボランティアとして自分が残した足跡を示したものだ。メールの本文には、「歩んできた道を銘記しておけば、未来の方向を見失うことなどあり得ない」とも書かれていた。その後、私も自室の壁に中国地図を貼って、様々な形をした色とりどりのシールで、ボランティアで行った地域や将来行ってみたい地域を表してみた。潮州、梅州、河源、南寧、吉首、海口…私は自分の歩いた道を心に刻み、そして心から行きたいところをじっと眺めている。

「日本の“けち”と“豪放さ”」

浙江大学经济学院金融学部 2 年 王翔



2007 年の末、日本の福田首相（当時）が中国を訪れた際、北京大学で講演した。講演の中で、彼は 1970 年代にあった国際的な石油危機と国内の環境問題が日本に与えた影響に言及した。また、彼は、“環境保護・省エネ分野”が中日協力の“特に重要な分野”になると指摘し、一連の具体案も提示した。展望性があり建設的なその視点は、中国側から賛同を得た。2008 年 5 月、胡錦濤主席が訪日した際も、省エネ分野での協力が中日協力の重要な分野に組み入れられていた。

エネルギー問題が日を追うごとに世界的な課題となっている現在、中国は経済発展における省エネという難題に直面している。そして日本は数十年の努力を経て、ちょうど省エネ分野において先進的な技術と十分な経験を擁している。省エネ分野においては、中日の相互補完性が非常に強く、この分野における両国の協力は前途洋々であり、期待できると言えよう。

日本の商人と取引のある友人によると、日本の商人はととても頭がきれて、入念であり、真面目なのだそう。商談の時、彼らは契約の一言一句を見逃すことはない。駆け引きをする時には、細かいことに拘り、しつこく粘る。そうした日本人は、“けち”で守銭奴とすら感じられることもある。しかし、契約が成立すると、日本側は僅かばかりも約束を疎かにすることはなく実行するのだという。もしかすると、頭が良く入念で真面目なのは、日本人が生まれつき身につけている一種の国民性であり、こうした厳格さのおかげで、日本人は限られた土地をきちんと整理して最大限に開発利用できたのではないかと私は思うのだ。省エネ分野においても、真面目で精密で厳格な精神のお陰で、日本人は省エネの極致にまで達することができたのだろう。この面において私の心に印象深く刻まれたのは、日本人が省エネ分野で見せる“けち”と“豪放さ”だった。

去年、父が日本を訪れた。僅か 6、7 日間の滞在ながら、日本人の省エネ分野での“綿密な計算”を目の当たりにしてきたという。父は感慨のあまり「日本人のやりくりのうまさは、日本へ行かないと分からない！」と思わず漏らしていた。

そもそも、父が日本へ行った時は正に炎天下だったが、日本の道行くサラリーマンは誰もが“涼しい”身なりをしていることに目が行ったという。男性はカジュアルな T シャツとショートパンツにノーネクタイ、若い女性はミニスカートが多かったとのこと。カジュアルで通勤するのは爽やかさのためなのか？まさか、こんな暑い日にオフィスで空調が入らないのか？父は、そんな疑問を持ち、その一行を引率する F 氏に尋ねた。F 氏によると、その地域のオフィスの多くは、環境省の呼びかけに応じて空調温度を 28 度に設定しているため、誰もが“涼しい”身なりをしているのだとのこと。「夏にオフィスの空調温度を 28 度に設定するだけで、一夏で日本全体だと 155 万ガロンの石油が節約できるんです！」と F 氏は付け加えたそう。

二日目、父の一行は、友人である O 氏のお宅を訪問した。父は、O 氏のご自宅の南向きの部屋の外に二本の大きな木が植えられていることに気が付いた。生い茂った木の葉が焼け付く日差しを遮ってくれ、家の中は爽やかに感じられたそう。O 氏はその木々を指さし、「あれは、一年を通して我が家の“天然空調”になっているのですよ！」と話したという。そもそも、その二本は落葉樹で、夏には枝葉が生い茂り日差しを遮るが、冬には葉が落ちてしまうので、温かい日差しが部屋に差し込むのだとのこと。

ちょうどその時、奥さんが買い物から帰ってきて、一行が省エネの話をしているのに加わり、主婦の“省エネ術”について話始めた。奥さんの話では、季節外れの青果が中国では人気のようだが、彼女のまわり主婦は季節外れの野菜や果物はあまり買わない、とのこと。そうした作物を生産するにはより多くのエネルギーが必要となるからだという。奥さんは普段から、季節の野菜や果物を買ひ、しかもできるだけ近い産地の食品を選ぶのだそう。そうすることで、輸送過程で消費されるエネルギーの節約になるとのこと。また、奥さんは“省エネ会計”の計算を披露してくれた。例えば、毎日3回、20℃の水1リットルを沸かす場合、中火を使うと強火に比べて年間2.38m³のガスを節約できること。野菜は先に電子レンジで半熟に加熱してから煮た方が、エネルギーの総消費量は減ること。家族全員で食事すれば、ばらばらに食べるより628キロジュールのエネルギーが節約できること…

そう、日本人は省エネについて確かに“けち”であるが、正にこうした少しずつの“けち”が集まってこそ、この分野で日本が注目を集める“豪放さ”となるのだ。統計によると、世界一の経済大国である米国と比べ、同じGDPを創造するにあたって日本で消費されるエネルギーは米国の37%しかなく、先進国の中で最もエネルギー消費量が少ない。太陽エネルギーを利用した発電などの新エネルギー技術においても、日本は研究開発や応用で世界最高水準である。

日本人の代々のしびとさと入念で非常に細かい仕事のお陰で、今日の日本は省エネ分野において誇るべき業績を手にし、世界の前線に立っているのだ。2010年の上海万博で、日本の“かいこ島”パビリオンでは、環境保護・省エネに関する理念と技術の完璧な結合が、余すところなく表現されている。“かいこ島”パビリオンの外部は銀白色で、太陽発電装置を含む超軽量“膜構造”コーティングを採用して半円形のドーム天井が形作られており、さながら“宇宙トーチカ”の趣がある。それは“呼吸するパビリオン”であり、設計に環境制御技術を取り入れ、光、水、空気といった自然の資源が最大限に利用されているという…

他山の石を以って玉を磨くべし。全世界のエネルギー価格がどんどん上昇して、エネルギーの需給ギャップが日に日に顕在化している今日、日本と中国に関わらず、“節約”は“ソースの開発”と同程度に重要になっている。エネルギー効率の向上、単位エネルギー消費の低減、省エネ低排出促進、生態環境の保護、これらは何れも、中国が今速やかに対応しなければならない課題である。省エネ分野において、中国は日本の経験を参考にすべきだと思う。何故なら、日本は、中国が参考にできる先進的な省エネの経験だけでなく、中国人が学ぶに値する省エネを命のように尊ぶ気質と精神も備えているからである。

「行く手を照らす文化のともしび」

中国人民大学经济学院経済学部 1年 羅樹郁



日本の漢学者・内藤湖南がかつて言ったことに、日本文化は豆乳で、中国文化はそれを固めて豆腐にするニガリということがある。これは、中日の文化が長い関係史を有し、すっかり融け合っていることをよく示したものである。

中日両国の2000年に亘る交流史の中でも、特に文化交流には眩いばかりの輝きがある。文化において互いに学び、参考にし合うことにより、隣同士である中日両国は文化の精神的な面において異常なほど近づき、互いを包摂し合う関係にまでなったのである。

遙か昔、国力が強大であった隋から唐の時代、日本は相前後して 17 陣の遣隋使、遣唐使を中国へ派遣した。古代中国の先進的な文化を学んだ日本人の中には、吉備真備、阿倍仲麻呂、空海、最澄、橘逸勢といった著名人も含まれているが、無名の優れた人物はさらに多く存在した。両国の文化交流を促進するため、彼らは道中の困難や危険を恐れず、逆巻く大波を乗り越えたのである。少なからぬ人が船と共に海原へ沈み、多くの人々が様々な原因によって帰国できないまま異郷で生涯を終えたのだ。世界の歴史を見渡しても、日本のように数百年もの間、1つの国家に大量の使者を送り続けた国は少ない。この現象は、中華文明の巨大な影響力のみならず、日本国民の勉学を好む美質をも表している。

日本が全面的に中国を師と仰いでいた“唐風時代”から、中国が生徒、日本が師となる 19 世紀末までには約 1200 年という時間がある。日本の明治維新以降、両国の文化交流には別の光景が現れた。近代中国は西方の新しい人文思想、政治理念、芸術スタイルを取り入れたが、その多くは日本を経由したものである。当時、自然科学、人文・社会科学に携わっていた人々の大部分が、近代文化と救国の手がかりを求めて日本へ渡ったのである。王国維、陳寅恪、郭沫若、魯迅、郁達夫、周作人、田漢、夏衍、この一連の名前は誰もがご存じだろう。そして、中国近代文化史に名を残すこれら人々には、日本で学んだか仕事をしたという共通点がある。彼らは多くの新しい近代文化、思想を中国に持ち帰ったのである。近代文学の種々の重要な形式を導入し、近代の中国文化に大きな影響を及ぼしたのだ。それだけではない。李大釗、陳独秀、周恩来、廖仲愷、蔡鍔、秋瑾、張聞天らも、日本からの帰国後に中国政界の風雲児となったのである。しかも、この中には中国の政治の方向性に影響を与えた者もいるのだ。

隣国に平和なし、と言う人もいる。世界の歴史を見渡すと、強国が隣り合っている場合、平和を保つことは困難であると言える。例えば、欧州の諸大国では、近代、絶えず戦争が起こっていた。1930 年代、日本が中国への侵略戦争を始め、中日友好の絆にひびが入った。新世紀に入って以降は、両国の関係に曲折が絶えない。中日両国に生じた近代以降の恩讐は、どのように解消したらいいのだろうか？経済協力の強化だけでなく、文化の交流にも確かに一定の強大な効力があると思う。文化における交流や融合を通じて、心理面での和解と認め合いを追求してこそ、両国関係を発展させる基礎が固められるのだ。

中日関係の正常化、特に中国の改革開放後には、中日文化交流の扉が再び開かれた。両国の文化交流が新しいブームを巻き起こしたのである。その扉を通じて、私達は驚くべき隣国を目の当たりにした。発達した経済と文化を持つ、強大で新しい日本である。教師が生徒を見るような気持ちを捨て、全く新しい眼差しを日本に向ける必要があるのだ。特に学んで参考にするという目的を持って、桜の国の背後にある文化的要素を研究すべきなのだ。ここで、日本の文化に関連する事例をいくつか簡単に紹介する。一を以って万を察し、背景事情を捉えていただきたい。

1994 年、広島アジア大会の閉幕式が終わった後、6 万人の会場にはごみ一つ落ちていなかった。翌日、西側の数紙が「敬うべき恐るべき日本民族！」と競って報道した。秩序、礼節、衛生を重んずる日本が、世界に深く印象づけられたのである。

愛知万博では、様々な文化芸術イベントが目もあやであったが、世界各国の観光客に適度なリズムを感じさせる独特の面白みがあった。米国のキッシンジャー元国務長官が日本を訪問した際、高度な協調性のある日本の接待を大いに賞賛していた。「この分野において日本と比較したら、米国は第三世界にしかならない」とまで述べている。日本人が集団の中で高度に協調するという特徴は、敬服に値するものである。

1980年代、米国政府は強大な圧力をかけ、ついに日本のコメ市場を開放するよう迫った。しかし、実際に開放されてみると、攻め込まれたはずの日本の農家はむしろ安堵したのである。安い米国米や中国人に言わせると香ばしくて粘り気があるはずのタイ米では、日本米に慣れた日本人の舌を満足させられなかったのだ！日本の消費者が狂信的といえるほど国産品を愛しているということも、日本人の団結力や国への忠誠を表している。

これほど強力な文化の凝集力を持ちながら、日本が強くない訳があるだろうか！昔から文化大国と自称してはいるが、我が古い大国には立ち後れた部分があり、忘れられた伝統や失われた文化もあることは認めざるを得ない。今や日本の下について学ぶべき時なのである。かつて日本人が貪るように中国文化を学んだ力を私達が発揮する番なのだ。歴史の深い恨みの記憶によって、実際の日本を完全に読み間違えることがあってはならない。日本文化の精華を真剣に引き出し、中華の伝統文化に再び命を吹き込むのだ。

2010年5月、温家宝首相が訪日した際、即興で「氷が溶けて春水となる。雨が青山を過ぎれば外には緑。大地には草木が茂っている。」という漢詩を詠んだ。私は中国青年の一人として、文化交流が氷を溶かし、歴史の傷を治す良薬になるよう、素晴らしい未来を築けるよう、心から望んでいる。

(2) 二等賞

「なぜ、日本人は中国語会話が下手なのか」

河南省 王運涛

中国では毎年「漢語橋」大会が行われている。毎回、多くの日本人が参加しているものの、優勝するのは得てして日本人ではない。

日本人の参加者が話す中国語は、多くがぎこちなく重たるい印象を残す。そうなってしまう原因は複雑だ。日本人留学生は相対的に内向的で、公共の場で話すことを好まない。人付き合いにものめり込むこともないし、中国人の友達も少ない。そういうことが積み重なり訓練する機会を逃してしまうことが多いのだ。語学の鍵は訓練だと言うのに。中国で勤務する日本人は、たいてい日系企業の管理職である。主観的には口語レベルを上げたがっているのに、一般の中国人と交流する機会は少ない。しかも、日系企業の中国人従業員は、多くが日本語を理解できるうえ、日本人という集団の性格上、彼らは付き合いの垣根を越えることができず、中国人の中に溶け込むことができない。口語レベルが高くないのも当然なことである。

日本人がきちんとした中国語を話せないのは、彼らが勉強嫌いだからでも、文法を軽視するからでも決してない。むしろ、その逆で、彼らはみんな謙虚で、礼儀正しく、勉強好きで、文法を重視するのだ。日本人はとても真面目に学習する。音声に対しては、その規則性に気を配り、特に会話経験のない言語については、より気を遣う。彼らは具体的な発音の要領をとっても重視する。中国語に特有なものを発音する場合は、舌先の正しい位置、口腔の具体的な形など。彼らは1つ1つのキーポイントを理解しようとする。それらのキーポイントを把握すれば、正確な発音ができると考えているのだ。言語の学習にとって、勉強好きで規則を重視することは、プラスの作用があると思われる。特に、研究を目的とする学習者には助けとなる。しかし、規則性を重視しすぎると、発音中に前後の文から影響を受けて生じる音の変化といった例外的用法について、受け入れることができなくなってしまうのである。ある発音が他の言葉の影響によって変化すると、彼らにとっては困難なものになってしまうのだ。

日本人がきちんとした中国語を話せないのは、学習過程における彼らの集団への依存心の強さとプラ

イドの高さに関係している。日本人留学生は、授業中にグループになって課題に取り組み、一緒に朗読したり討論したりすることを好む。自分に考えがある時でも、他人の同意を得てからでなければ、公表しようとはしない。日本人が過度に集団を頼ってしまうのは、東方国家の強い家族意識から来ているものかもしれない。集団に頼ることで自分が直面するリスクを低減するのに慣れているのだ。語学学習にとっては、集団への依存にも一定の利点がある。言語は必然的に交流の中で現れるものであるため、言語の訓練には相互協力が必要となるからである。しかし、過度に集団に頼ってしまうと、学習者の主観性や能動性を発揮することができなくなってしまうのだ。チームが共同で課題を遂行すると、メンバーの焦燥感は低下するが、教師はその状態を具体的に把握することができず、個別に指導することができない。プライドが高い日本人留学生は、言い間違いをして他人に笑われるのを恐れる。十分な自信がなければ公の場で発表することができないのだ。発表の場が開かれていればいる程、彼らはさらに他人の見方を気にするようになる。しかし、自ら口を開かず、公の場で話をしようとしなければ、周囲の人からのフィード・バックを得ることはできず、発音上の間違いを直すこともできない。プライドを重んじて発話を避けていると、学習が困難であっても、それを中国語教師に伝えることはできない。教師がニーズを把握できなければ、多くの時間を無駄にし、とうに理解されているはずの内容をまた講義することになるのだ。

日本人がきちんとした中国語を話せないのは、日本人の曖昧でおとなしく内向的な性格とも関連する。日本人は人付き合いでも失敗を恐れ、発話する側より聞く側に回ってばかりいる。はっきり言わなければならない場合であっても、可否を断言することはなく、余地を残しておくのだ。日本人留学生は、一般的に公の場で人と意見が食い違うことはない。たとえ同じ意見でなくても、そうした違いを直接的に表現することはなく、やや婉曲な方法で暗示するのだ。相手が理解できない場合、得てして先に賛同してしまうことによって争いを避けている。そのため、日本人留学生が教師に質問をすることは少ない。指名されて問題に回答する時も、探りを入れるような語気で話しながら教師の反応を観察し、自分の回答を調整してしまうのだ。日本の留学生は静かで内向的である。いつも黙っていることが多く、大言壮語することは少ない。表情も言葉も実に曖昧で、腹の底で何を考えているのか分からないと思わせる。こうした性格の特徴は、日本の伝統文化に根ざしているのかもしれない。日本文化においては、口数の少ない人物が得てして修養を積んだ人のように思われている。語学学習について言えば、曖昧さと内向性はとても不利な要素である。言葉は“話す”ものであるので、たくさん話して練習しないと発音は向上しない。

日本人がきちんとした中国語を話せないのは、日本人が中国語を学習する方法とも関連する。日本人は中国語を学ぶ時、電子メールや手紙を使って学習内容を探求するような方法を好み、直接交流するような方法を好まない。学習上の困難を書き記すことはあっても、口に出して述べようとはしないのだ。大多数の日本人は、書面資料と向き合っ、細かな文法に関心を注ぐ。語学学習を科学研究のように扱う者さえいる程である。こうした厳格な態度は、日本民族が階級制度を重視するのと大いに関係しているのかもしれない。日本は階級社会であり、誰もが社会の中で特定の身分を持っている。勝手にその枠を越えることはできず、何事も手順に従って行い、勝手に手順を乱すことはできない。言語学習にとって、文法を重視することは、文章の理解や作文における誤りを減らすことにつながる。このため、日本人の読み書き能力は得てして優れている。しかし、規則性を重視しすぎると、口語に含まれる大量の省略や例外、さらには“自殺された”などという常軌を逸した用法などが受け入れられなくなる。だから、日本人の会話能力は相対的に劣ってしまうことになるのだ。

中国に留学する日本人は、得てして本当の友達、特に日本人以外の友達を作ることができない。日本人留学生の交流に大きな影響を与えているのは、その性格である。欧米の学生が日本人に対して感じるのは、とても礼儀正しいが、常に距離感があるということだ。一緒にいても胸の内を語らないので、近寄り難いものを感じるのだという。また、日本人が苦勞して勉学に励み、厳格に自律する態度と学習にきちんと向き合う態度は、他国の留学生の多くには完璧主義に映り、付き合い難いと感じさせてしまう。日本人留学生は、他国の友人と付き合いわず、同胞との付き合いにより多くの時間を割く。そのため、中国にいる日本人はより固まりやすく、多くのことを共同で決めがちである。もし、一人が教師や同級生に誤った対応を受けたなら、往々にして日本人留学生全員の反感を招いてしまう。

「“森田療法”から環境保護を考える」

北京市 付如石

心理学者である森田正馬が作り出した“森田療法”に、私が初めて触れたのは2年前のことだった。当時は心身を調節するいい方法であると思っていたが、神経症、特に強迫神経症によく効くようである。より深く学ぶにつれて分かったことは、森田療法は単なる心理療法ではなく、むしろ先進的な哲学の理念であり、環境保護についても参考にするに値するということである。

“自然に従い、ありのままに”とは、森田療法の核心である。しかし、そのスタンスは、環境保護の“核心”でもあるのではないか？日本は資源に恵まれず国土も狭いが、日本人は諦めることなく“自然に従い”、自らの弱点と向き合い、“ありのままに”素養の向上に努めてきた。外需主導の経済を発展させ、生態環境を保護することより、日本は世界の経済大国となったのだ。現在の日本は、経済も科学技術もとうに先進国のそれであり、“金山、銀山”がある。そして、今の日本には青々とした山と川がある—日本の森林率は世界でも上位であり、精緻で丁寧な農業は世界の模範となっている。

これとは逆に中国は、国土が広く豊かで、天然資源も総量は大きいのだが、一人当たりの占有量はむしろ不足している。経済発展の過程で自然環境を犠牲にし、一時的な経済成長と引き換えるようなことがあってはならない。“自然に従い、ありのままに”発展させる必要がある。人としての価値を十分に発揮して労働者の資質を高め、技術力、輸出力のある環境保全型経済を発展させ、グリーンの飛躍を実現しなければならないのだ。

森田療法についての現代の権威者である田代信雄教授によると、森田療法の最高の境地は“純潔な心”であるという。環境保護を行うにあたって必要なのは、正にこの“純潔な心”ではないだろうか？官僚Aが、個人の業績にすべく、大規模な不動産購入やイメージばかりの工事を行うのは、人力と財力の無駄であり、一種の“悪政”でもある。官僚Bが、環境保護のため、国民の生活水準を引き上げるため、緑化や生活に直結する事業を大に行うのは、私達が尊ぶ“純潔な心”があつてこそである。

“純潔な心”は、人間が最も自然に身につけているものであり、人類の生存がかかる宝物である。自然環境の保護が話題にされることは多いが、私達の精神を保護する必要性については、考えたことがあるだろうか？

少年時代を過ごした郷里は、風景が美しい村落だった。いつも仲間と池ではしゃいだり、魚を捕まえたりしていた記憶がある。しかし、その郷里も、今や池から異臭が漂い、魚など全くなりなくなっている。自然環境の変遷に、私は少し感傷を覚えた。しかし、もっと傷ついたのは、人々の精神の変遷である。小さい頃、村人はみんな畑仕事をしていた。ご近所は仲が良く、みんなが自然環境の保護に気をつけていた。或いは自然環境を壊すようなことなど思いつかなかったのか、する機会がなかったのかもしれな

いが。工業化が進み、労働集約型産業が勃興すると、村人はこぞって稼ぎに出てしまい、村が寂しくなってしまった。人々の慌ただしい足取り、“鍵っ子”を見るにつけ、何とも言えない喪失感ともの寂しさを覚える。

人間は心から森林、海洋、青い空を愛するはずなのに、なぜ、無意識に、それどころか故意に壊そうとしてしまうのだろうか？森田療法に関する私の僅かばかりの収穫が、この文を読む方に環境保護という考えを啓発することができることを、私は心から望んでいる。また、中日両国民が互いに学び、助け合い、自然環境を共に保護し、私達共有の自然環境を保護していくことを、私は望んでいる。

「ある討論の授業」

重慶市 魏乾

学校で「感知日本・調和がとれた交流」をテーマとする作文コンクールの開催が決まった。日本文化に含まれる何かしらの要素を、例を挙げて分かりやすく文章にまとめるという課題だ。私は日本文化に対して一定の理解があるものの、テーマの選定には頭を使った。ランチタイムでさえ、ずっと考えにふけていたのだ。「何で食べないの？箸なんていじってさあ」とルームメイトにこづかれた。「箸？」私は無意識に手の中を見た一普段と何ら変わらない箸だったが、ルームメイトの言葉で私の思考回路は遠く遠くへとつながっていった…

授業のチャイムがなり、李先生がしなやかな足取りで教室にいらっしゃった。

「箸は食器の一種で、食べ物を挟んで口に運ぶために用いる。箸の起源は中国にあり、古代中国語では表記も“箸”だった。“箸”は“助”と同音で、食事を助ける道具であることを意味している。“箸”は“住”と同音で、停滞するという不吉な意味を持つため、後の人は停滞の反意語である“快”に竹冠を付けてハシをそう呼ぶことにした。これが現代中国語のハシ(kuaizi)になっている。ここからは、みんなに中日両国の箸にまつわる文化について話してもらおうよ」李先生の前置きは簡潔で明瞭だった。

一列目の席にいる陳濤さんがまず立ち上がり、「箸は、使い方に日中で違いがあります。」と落ち着いた口調で発言した。「中国では箸の使い方に男女ともあまりこだわりはありません。しかし、日本では男性用の箸は女性用のものよりやや太くなっています。これは、そうすることにより、女性の食卓量が少ないように見せ、女性の優雅さを表すことができるからです。中国にはこうした考え方がないようで、男女とも区別なく箸を使っているのです。」とのことだった。

李先生はうなずき、「はい、よく観察しているね。」と評価して他の生徒に続きを促した。

学習委員の徐敏さんが起立して発言した。「中日では箸の長さも違います。中国の箸は、日本のものよりかなり長くなっています。中国の伝統的な家庭では数々の料理を載せた大きな食卓を囲む習慣があるため、箸が短いと、遠くにある料理が取れません。立ち上がって料理を取るのも失礼なので、時間が経つうちに箸は長く進化したのです。一お陰で、気軽に遠くから料理を取ることもでき、近くの人を手伝ってあげることもできます。しかし、日本では一人前ずつ料理が盛られます。このため、短い箸でも何ら問題はあります。それに、日本では他人に料理を取ってあげるという習慣がありません。」

すると、「私も」と張強さんが待ちきれない様子で手を挙げた。李先生はうなずいて、発言を認めた。

「中日では箸の形状も違います。中国の箸は先端が丸いですが、日本の箸は尖っています。大多数の中国人は内陸で暮らしており、農業と牧畜が主なので、食べる物も穀物と肉類が主です。こうした食物には先端の丸い箸が比較的便利です。しかし、大多数の日本人は島で暮らしているため、主に魚を食べます。先端の尖った箸は魚の小骨をよけやすく、魚を食べるには便利です。中日の生活方式の違いが最

最終的に箸の形状に影響したのです。」張強さんは一呼吸おいて続けた。「中日では箸づかいの作法も違います。中国人は、長さの揃わない箸を忌み嫌います。主人や来客のうち、いずれかの夫婦が早死にする兆しであるためです。また、対の色が違う箸も使いません。家庭内不和の兆しだからです。一方、日本人は、芋類を突き刺して口に運ぶことをタブーとしています。箸で皿を回すこともタブーです。」

張強さんが答え終わると、班長の李波さんが続けた。「箸を使う習慣の面でも、中日には違いがあります。日本人は使い捨ての割り箸を好み、一度で捨ててしまいます。でも、中国人は一組の箸を何度も使うことを好みます。日本人が使い捨ての箸を好むのは、日本の茶道にある“一期一会”の精神と通じるものがあります。そして、中国人が箸を繰り返し使うという事実は、中国人の強い執着を表しています。多くの日本人が、物事は絶えず移り変わるものであると信じ、当面のことを重視しますが、中国人は後のことを重視し、時間が全てを変えられると信じているのです。」

生徒達の熱のこもった討論を聞きながら、李先生は満足そうな笑みを浮かべられた。

「みんな、とても深く観察しているね。中日の箸にまつわる文化面での違いは、基本的に整理できたようだ。もちろん、些細な箸の文化からでも中日の文化的な違いを見いだすことはできる。それぞれ独自の風土、人情、文化が日常生活のあれこれに浸透していったものだからね。ただし、みんなに覚えておいて欲しいのは、箸の文化においても、中日は決して全く違うわけではないということだ。箸の文化の起源から言うと、中日はそもそも同族だ。箸の起源は中国の古代で、唐の時代に遣唐使が日本へ伝えた。それを基礎として、日本では日本の社会環境、風習、人情などに応じて箸を改造してきた。それが今日見られる日本の箸なんだ。中日の箸の文化は、中日の文化の違いを示すだけでなく、両国の昔からの深い友情の証しでもあると言えるね！」

「箸を使う時、食物を挟むという目的を達成するには、二本が相互に協力し、協調する必要がある。同様に、ちょうど二本一組の箸のように中日両国も相互に協力し、協調して、友好的な隣国であるという関係を維持する必要がある。そうすることで、最終的には両国の調和ある発展と共に進歩という目的を実現できる…」

「ねえ、何を考えてるの？ぼーっとしてるの？」ルームメイトにまたこづかれ、私の思考が途切れてしまった。笑ってふと我に返ると、友達はランチをほとんど食べ終わっていたのに、私は全く箸を動かしていなかった。でも、内心では十分に嬉しかった。ついに自分の書くテーマが見つかったのだから。

「日本の“ごみを宝にする”知恵と啓発」

陝西省 劉沢照

日本は“第二次大戦”後の“焦土の時代”を経て、廃墟の上に世界でも稀にみる経済復興を実現した。その過程では廃棄物による環境破壊が深刻化し、一億を超える日本国民をも蝕んでいた。しかし、それ故に、全く新しい道が生み出されたのである。

1960～70年代に生まれた日本人にとって、石綿災害と水俣病は、永遠に忘れられない苦しみの記憶かもしれない。突如降って湧いた災難が、多くの人々の心身を傷つけ、肉親を亡くして崩壊する家庭さえあった。国家経済にも深い傷を負わせた。そこには工業汚染がもたらした連鎖反応だけでなく、廃棄物を軽視し続けたことによる深刻な問題もあった。戦後経済の急速な発展、消費の高度化、大量の廃棄物の発生、これらがもたらす災害は専門家の予測を遙かに超え、国民を窮地に陥れた。いつ頃からか、住民組織や自治体が全国的に害虫駆除の活動を始めた。1971年に勃発した“東京ゴミ戦争”により、廃棄物処理の真相にある根深い矛盾が浮き彫りとなった。復興の途上で生じた“公害大国”の汚名は、

日本国民の心を深く傷つけた。苦痛の中で、人々は、次第に廃棄物の問題が衛生面だけでなく環境面でも生じているということに認識し始めた。

まさに上述の苦しみを味わったせいなのか、筆者が日本という国に触れた時、日本人は、環境問題について語る際、自然に対するある種の畏敬のようなものを見せていた。このような感情から、環境整備の概念に基づき、日本社会には 180 度の転換が起こったのだ。日本人にとって、廃棄物は簡単に処理できる対象ではなく、“置く場所”を間違えられた重要な戦略資源なのである。今のところ一連の廃棄物処理政策に基づき、日本にはごみの再資源化 (recycle)、減量化 (reduce)、再使用 (reuse) の 3R 体制が築かれている。目的は、空気中、地中、水中に分布する廃棄物を循環資源として十分に利用して循環型社会を実現することである。2000 年、日本では「循環型社会基本法」が公布された。その中には、廃棄物中に存在する有用な物質（価格の有無に関わらず）を循環物質として見なすと明記されている。

数年前、ビジネス交流を行った際、日本の NKK 京浜製鉄所で業務デモンストレーション用画面を参観したことがある。その時最も印象深かったのは、溶鉱炉の転炉の現場だった。鉄骨構造の何千平米もの広大な現場では、意外にも空気が爽やかで、ガラスでしつらえた池に鯉が悠然と泳いでいたのだ。よく見ると、全ての屋根に巨大な集塵機が設置されており、生産活動で生じる各種の粉塵や排気が徹底して濾過されていた。石炭や鉄鉱石のベルトコンベアにはいずれも蓋がされており、脱硫装置は全て肥料生産と一体化されていた。廃水と精練時に出た廃棄物は、自動コントロール装置を通じて十分に回収利用されているという（再利用率は 99%に達するとのこと）。見学後、筆者は思わず驚嘆した。

日本政府が、ここ数年来、市場などの助けを借りて廃棄物の急速な増大に対して絶えず管理を強化してきたというのは、賞賛に値する。日本では、生活ごみであろうと産業廃棄物であろうと、政府の認可を受けた専門企業によって処理されなければならない。これらの企業は一定量のごみを引き受け、その分類に従って課金する。料金のランクや基準にこそばらつきはあるが、いずれも処理業者が利益を図るに十分なものである。勿論、料金を受け取りながら処理をしない業者や、規定に従った処理を行わない業者には厳罰が科せられる。刑事責任を問われる可能性すらあるのだ。このほか、“リサイクルすれば資源、捨てればごみ”という鮮明なスローガンも、日を追って多くの日本企業に自発的に受け入れられるようになってきている。

日本は技術の模倣と改善に秀でている民族だが、廃棄物の循環利用においては、世界の最前線にいる。大きいものでは廃棄処分の自動車や船舶、建築廃材、小さいものでは空き瓶、空き缶、電池板、紙くすまで、日本人の革新思考は留まるところなく、独特で優れた技術と処理のフローを開発したと言える。タイヤの回収を例に挙げると、2008 年に日本全国で廃棄されたタイヤの数量は 1.5 億本である。新日鐵は、独自技術の冷鉄源溶解法 (SMP) で廃タイヤを燃料化し、そのうちの高級炭素繊維をくず鉄の代替品として高級鋼を製造している。石油、ガス、石炭の剰余分は燃料の代替品として再利用し、再資源化率は 100%にもなるという。計算によると、この技術により日本全国で出る廃タイヤの 10%以上を利用することができ、省エネ効果は、重油に換算すると 10 万 kL/年にもなり、CO₂の排出量で 15 万 t 相当が削減できる。

もし、中日両国がこの分野において高次元の協力を強化することができれば、必ずや省エネ低排出、循環経済の推進について良い見本になることだろうと思う。

日本の国民からすると、環境方針の決定は国民全員の利益に関わることであり、いかなる人の利益も環境問題によってダメージを受けてはならない。この認識は、国が子供から大人までに推進する環境保

護教育体系と密接に結びついている。環境を保護する国民となり、環境保護の先頭に立つことが、日本社会の新しいトレンドになっているのだ。今、“ごみを宝にする”という循環の観念は、日本の社会の一種の公共文化と文明理念であり、企業の生産、産業の発展、一般市民の日常生活に溶け込んで、社会全体が意識的に遵守する行動規範となっている。全社会の統一意見を強調し、協力を形成させるというのが、日本の廃棄物処理のキーポイントである。もしかすると、この点が官民協力のオペレーショナルな発想を提供してくれているのかもしれない。

「中日のスポーツ文化交流から得たもの」

広西省 庄巖

歴史を遡れば、中日両国がスポーツ界で競争し協力してきたことは、双方に利益をもたらし、アジアのスポーツの発展を促進してきた。例えば、1960年代のバレーボール監督・大松博文さんは中国に“三従一大”（厳しく、難しく、実践から）という訓練理念を持ち込んだ。後に中国女子バレーが“五連覇”という輝かしい成績を収めたのはこうした理念による。21世紀に入ると、日本の卓球選手・福原愛さんが中国に滞在してスーパーリーグに参戦している。彼女自身の実力も絶えず伸びてきたが、日本の女子卓球チームが世界ランキングに返り咲くという重要な効果もあった。2008年の北京五輪では、日本のシンクロナイズド・スイミングの“母”と呼ばれる井村雅代さんが、中国チームを率いて初の団体戦銅メダルを獲得し、歴史的な快挙を成し遂げた。中国側の得意種目について様々な形で中国からの援助が入り、この種目に関する日本側のレベルが向上した例は、枚挙にいとまがない。

私は、スポーツ人文社会学を専攻する一大学院生である。ここ数年、一連の国際交流活動を経験してきた中で、中日におけるスポーツ文化の共存共栄には深く感じるどころがあり、そこから得られたものも非常に多い。

2007年8月24～28日、中日韓の三ヶ国が持ち回りで開催する中日韓青少年スポーツ大会の第15回大会は、桂林市で実施された。この大会は、中日韓の青少年がスポーツを通じて交流する格好の舞台となっており、三ヶ国の青少年のスポーツにおける潜在能力を検証する場ともなっている。卓球の世界チャンピオンである中国の王楠、王励勤などは、共にこの大会で才能を見いだされたのである。私は『桂林晩報』の特派員として、幸運にもこの大会の取材と報道に関わることができた。今でも印象深く心に残っているのは、日本のバスケットボールチームが男女ともに礼儀正しかったことである。メンバー交代の度、選手は観客に向かって深く頭を下げていたのだ。日本の男女バレーボールチームは、試合が終わる度、素早く一列に並んでコーチの講評に耳を傾けていた。講評が終わると、きちんとコーチに敬礼をしていた。気になったのは、その後の試合である。中国チームのメンバーも、交代時に観客へ頭を下げていたのだ。もしや、これは日本チームから学んだのだろうか？勿論、試合のメインは互いに技術を磨き合う過程の方である。当時、日本のメンバーは、中国選手の優れた身体能力と高度なテクニックに強い憧れを持っていた。ある日本の男子バスケットボール選手にいたっては、将来、出来れば、中国でCBAリーグに参加したいと語っていた。

2007年9月、私は成都体育学院に進学し、スポーツ人文社会学専攻の修士課程を学ぶことにした。進学して間もなく、成都体育学院が日本の筑波大学と学術交流を続けてきたということ知った。多くの先生がはるばる日本に渡って客員教授を務め、帰国すると日本のスポーツ文化に関する沢山の論文を発表している。彼らも中日のスポーツ文化交流を広める上で貢献しているのだ。こうした先生方からは、